

第1回

「東の飛鳥とは」

しもつけ風土記の丘資料館

下野市は古代東国を代表する古墳や下野薬師寺跡・下野国分寺跡・尼寺跡などが所在する地域であることから、日本の古代史を語るうえで重要な史跡や遺跡の宝庫である奈良県明日香村にならい、本市の文化財群を「東の飛鳥」と総称しています。

では、古代政治・文化の中心地であった飛鳥や奈良とどんなかわりがあったのか？双方の地域に所在する史跡にどのようなつながりがあるのか？など、回を追ってお伝えする新シリーズが始まります。

今回は下野市の歴史的背景をお話します。



下野市は発掘調査のデータや守り継がれてきた文化財が示すように、はるか昔から穏やかな気候に恵まれたとても住みやすい場所でした。

一番古い住民はおよそ1万1千年前に定住したと考えられる人たちで、彼らが使用した縄文土器(爪形文土器※写真1)が出土しています。長い縄文時代の後の弥生時代を経て、三王山地区に前方後方墳を造った人たちが移住してきます。

古墳時代後期の6世紀後半にはさらに新たな住民が定住したようで、その中には現在の埼玉県北部や群馬県東部から移住してきた人、朝鮮半島から渡来してきた人などがいたようです。この頃にはヤマト政権と全国各地を結ぶネットワークができあがり、多くの人や情報が東国へも行き来したようです。

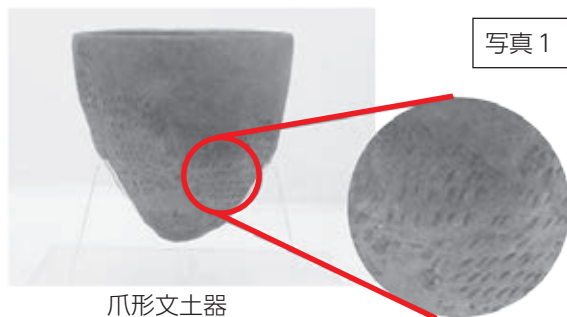


写真1

爪形文土器

拡大すると、爪でつけられたような模様があります。これは、まだ縄を擦ることができない人たちが作った土器で、縄目ではなく親指の爪でつけたような模様が外側に付けられています。



べにまる

仏教伝来から1世紀を経て、飛鳥時代後半の600年代後半には、東国各地でも寺院が建立されましたが、中でも下野薬師寺は東国を代表する規模の寺院として建立されました。その背景には、大宝元(701)年に当時東アジアの先進地であった唐の法令を模倣して作成された大宝律令の編さんに深く関わった、下毛野朝臣古麻呂を輩出した下毛野一族の勢力基盤が当地にあったことが考えられます。700年代初頭になると、中央政府による対東北政策などの関係から下野薬師寺に国費が投入され、壮大な寺院へと改修されました。680年頃の創建段階、720年代の大改修期においても中央から技術者が投入されて下野薬師寺が建設されたことを、出土する瓦の文様や、正倉院文書の記録が物語っています。

栃木市に所在する下野国府は、藤原京や平城京と東山道で結ばれており、モノやヒト、情報が常に往来していました。現在は東海道新幹線や飛行機でおよそ600kmの距離を移動しますが、当時は上野(群馬)ー信濃(長野)ー美濃(岐阜)ー近江(滋賀)を経て都へと向かい、駅馬を乗り継ぎながら東山道を経由しおよそ5日で都に行った記録も文献から読み取ることができます。

都が置かれた飛鳥や奈良とは距離が離れていても決して遠く無縁の地ではなかったのです。



下野薬師寺跡復元回廊